
聖夜の夢の中で

聖闘士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜の夢の中で

【Nコード】

N1085J

【作者名】

聖闘士

【あらすじ】

ある一軒家に、おじいさんと女の子が住んでいました。

今日は待ちに待ったクリスマスイブ。

果たして、女の子の一番欲しいプレゼントはもらえるのでしょうか？

今日はクリスマスイブの昼下がり、町はどこも綺麗に飾り付けられています。

町外れにある一軒の小さな家の大広間でも、もみの木が部屋の真ん中に飾ってあり、他の家と比べると少々見劣りのするその部屋も、いつもよりずっと立派に見えます。

そしてその部屋の暖炉の前では、おじいさんが揺り椅子に腰掛けながら、居眠りをしていました。

—— 良い夢でも見ているのでしょうか。

おじいさんの寝顔にはうつすらと笑みが浮かんでおり、とても幸せそうです。

そこへ

「ドタン！」

という玄関のドアを乱暴に開ける音がしました。そして

「おじいさんつつっ！」

という、家中を揺るがすような大声が響きわたりました。

おじいさんはビックリして椅子の上から飛び上がると、あたりをキョロキョロと見回しました。

すると今度は大広間のドアが乱暴に開かれ、金色の髪と水色の瞳を持った小さな女の子が、その人形みたいにかわいらしい顔を興奮で真っ赤にさせながら、大広間へと入ってきました。そしておじいさんに向かって

「おじいさんっ！ホントはサンタさんなんていないのっ？」

と、大声で叫びました。

おじいさんは女の子の突然の大声に驚きましたが、女の子の怒りの原因が何だか分かると、首を横に振りながら

「メアリー、一体誰にそんなことを言われたんだい？」

と女の子に尋ねました。

「今日、学校で男の子たちに言われたのっ……サンタなんて居ないんだって、ウソっぱちなんだって……」

メアリーはわけを話しているとだんだん元気が無くなっていき、話し終わると下を向いてしまいました。

おじいさんはにっこりと微笑むと、メアリーに向かって言いました。

「そんなことはないよ、メアリー。サンタさんは居るし、今年もメアリーにプレゼントを持ってきてくれるさ」

「・・・ホント、おじいさん？」

メアリーは震える声で、おじいさんに聞きました。

「もちろん本当だよ、メアリー。何も心配する事はない」

「うん！」

「それじゃあ、パーティーの準備をするから、手を洗っておいで」

「はい」

やっと、メアリーは花の咲くような笑顔になりました。

——パーティーの終わった大広間では、メアリーが、おじいさんに向かって文句を叫んでいました。

「あたし、絶対寝ないもんっ！あたし、サンタさんが来るまで起きてるもんっ！」

おじいさんはため息を一つつくと、メアリーに向かって穏やかに話しかけました。

「・・・いいかい、メアリー。サンタさんはよい子のところにしか来ないんだよ。メアリーはサンタさんにプレゼントをもらいたくないのかい？」

「・・・もらいたいわ・・・」

メアリーの小さな返事を聞くとおじいさんはにっこりと微笑んで

「ならばベッドに行きなさい——子供はもう夢をみる時間だ」

と、メアリーを寝室へと送り出しました。

——ベッドに入ったメアリーは、落ちてきそうになるまぶたを必死に押し上げ、眠らないように頑張っていました。

「サンタさんがホントにいるってことを、あたしが確かめるんだから！」

そう思いつつも、さっきまでのパーティーではしゃぎすぎたメアリーは、思わずウトウトとしてしまいました・・・

——再びまぶたを持ち上げたとき、メアリーは「あれ？」と思いました。

自分は寝室のベッドでサンタさんを待っていたはずなのに、いつの間にか知らないところにいるのです。

ただメアリーは、ちっとも怖くはありませんでした。なぜなら、メアリーの周りは何だか明るくて、暖かくて、とっても穏やかな気分だったからです。

メアリーが不思議に思いつつものんびりしていたら、後ろから

「こんばんは、メアリー」

という声がしました。

メアリーが後ろを振り向いてみると、そこには――

――全身を赤い衣装につつまれ、真っ白なヒゲをはやした男の
人が、穏やかに微笑みながら立っていました。

メアリーは一瞬、おじいさんの変装かと思いました。すぐに違
うと分かりました。

なぜならその男の人は、おじいさんよりもずっと太っていて、髪
の毛もフサフサだったからです。

「もしかして・・・サンタさん？」

メアリーが期待を込めて問いかけると、男は

「その通り！メリークリスマス、メアリー！」

と、愉快でたまらないという顔をしながら答えました。

メアリーはそれを聞くと

「やっぱり、サンタさんはホントにいたのね！」

と、大喜びです。そして、あたりをキョロキョロと見渡しながら

「あたしへのプレゼントはドコなの、サンタさん？私が一番欲しい『プレゼント』——あたしのパパとママはどこにいるの？」

その質問をされた瞬間、サンタは少し悲しそうな顔をしながら

「残念だけど・・・キミのパパとママをプレゼントすることは出来ないんだよ、メアリー」

「どうしてっ！アナタはホントのサンタさん何でしょう！アタシ、

ずっといい子にしていたわっ！

・・・おじいさんが料理を作るのをお手伝いしたし・・・欲しかったオモチャだつてガマンした・・・それに、パパとママがいなくなつてから、一度もおじいさんに『寂しい』って言わなかったわ・・・なのに・・・どうして・・・ねえ、サンタさん・・・どうして？」

メアリーは涙で顔をグシャグシャにしながら聞きました。

そんなメアリーの前に、サンタはメアリーが枕元に用意していた小さな白い靴下を差し出して言いました。

「メアリー、サンタのプレゼントは靴下に入るサイズじゃないとダメなんだよ——キミのパパとママは、その靴下には入りきらないだろう？」

「・・・どうしてっ・・・どうしてプレゼントは靴下に入るサイズじゃないとダメなの・・・欲しいプレゼントがもらえれば、みんなが幸せになれるのに・・・」

「それはね、メアリー・・・『ヒト』が幸せを手に入れるためには、『ヒト』自身の手で幸せをつかまなきゃダメなんだよ——サンタが出来るのは『ヒト』が幸せを手に入れるのを、ほんの少し後押しする事だけなんだ」

「むずかしいコトは分からないわっ！・・・パパとママに会いたい・・・パパとママに会わせてよう・・・」

そう言つて泣きじゃくるメアリーの顔から、サンタはそつと涙をふきとりました。

「泣くのはおやめ、メアリー。私はキミのパパとママは連れてこれなかったけれど、キミのためのプレゼントはちゃんとあるんだ」

そう言つてサンタは、先ほどの靴下から一通の手紙を取り出ししました。

メアリーはその手紙を見ると

「——ママの字だわ！」

「その通り。キミのパパとママが最期に『キミに渡して欲しい』と、コレを私に預けていたんだ。——さあ 開けてごらん、メアリー」

メアリーは涙をふくことも忘れて、両手でその手紙を受け取ると——
——まるでそれが価値のある宝石であるかの様に——大切に大切に抱きしめました。

そして、震える手でゆっくりと手紙を広げると——

今日は待ちに待ったクリスマス、町はどこも綺麗に飾り付けられています。

町外れにある一軒の小さな家の大広間でも、昨日開かれたパーティーの気分が少し残っていて、他の家と比べると少々見劣りのするその部屋も、いつもよりずっと立派に見えます。

そしてその家の寝室では、一人のかわいらしい女の子が、ベッドで眠っていました。

——良い夢でも見ているのでしょうか。

その女の子の寝顔には、涙のあとと一緒に満ち足りた笑みが浮かんでおり、とてもとても幸せそうです。

プレゼントを入れるためでしょう。その女の子の枕元には、小さな白い靴下が置かれています。

——そしてその中には、一通の手紙がとても大切にしまわれていました。

(後書き)

「小説家になろう」のみなさまに、素敵なクリスマスが訪れますように

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1085j/>

聖夜の夢の中で

2010年10月16日00時09分発行